＜原　著＞

特別な支援を必要とする子どもを育てる親の子どもに対する認識の変化

村上　理絵*・高橋　　彩**・綱島　ちえ***
綱島　庸介****・村上　沙織*****・酒井　和香******

本研究の目的は、特別な支援を必要とする子どもを育てる親が、成長にともなって変化する子どもの行動や様子をどのように認識しているのかについて、認識変容モデルを生成することとした。特別な支援を必要とする子どもを育てる父母１組を対象に面接を実施し、出生から現在までの子どもの育ちと、育ちに対する思いについての語りを得た。修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて語りを分析した結果、23個の概念から10個のカテゴリーを生成し、最終的に５個のカテゴリーグループを編成した。結果、認識は子どもの成長にともなって変容していくものの、なぜそのような行動をとるのだろうかと子どもの行動を解釈したり、課題を発見したり、子どもの成長や変化を感じたりすることについては、断続的に続けられていた。不安や子育てに対する徒労感は継続的に一定程度見られるものの、社会資源とのつながりにより、保護者の認識に変容が見られたことで、不安や徒労感が減少し、家族を含めた将来への展望が語られた。

キーワード：発達障害　成長　親　認識　変化

Ⅰ．はじめに

子どもの成長にともない、親の子どもに対する認識は変化する。親が子どものことをどのように認識しているかについて支援者が理解することは、親が子どもを支援することができる状態にあるかを判断したり、親が支援に何を求めているのかを把握したり、適切で的確な支援を実施したりするために意義深いと思われる。保護者支援の立場からは、障害児を養育する家族を支援する立場にある者は、障害児自身のニーズに対応するだけでなく、親の感情を理解し、その感情に寄り添うといった支援をしながら、子どもの発達状況や将来像を可能な限り正確に伝え、親が日々の養育で感じる悩みや不安などの感情を軽減していくなど、親の精神的・情緒的安定をより積極的に支援していくことが重要な課題となる（大西・永田・武井, 2013）。また、子どもに対する親の認識に影響を与える要因が明らかになれば、変化を予測しながら支援を考えていくことが可能になると考えられる。

障害のある子どもを親がどのように受け止めているのかについては、主に親の障害受容過程として捉えられてきた。例えば、Drotar, Baskiewicz, Irvin, Kennell & Klaus（1975）は、先天性奇形のある子どもの親を対象に研究を行い、親が障害を受容する過程を、ショック、否認、悲しみと怒り、適応、再起などの段階に分け、段階を踏んで最終的には受容にたどり着くとする「段階説」について説明した。一方、Olshansky（1962）は、知的障害のある子どもの親を対象に研究を行い、Drotar et al.（1975）の親がいずれ障害に適応するという主張とは反対に、親が子どもに障害があると知った後、絶え間なく悲しみ続ける「慢性的悲哀」の状態にあることを指摘した。さらに中田（1995）は、親の感情は、子どもの障害を知ってから全て適応の過程にあり、そこには障害を肯定する気持ちと否定する気持ちの両方の感情が表裏関係で常に存在しているとする「螺旋形モデル」を提唱した。

広汎性発達障害児を育てる親の感情体験については、複数の研究により、常に肯定的な感情と否定的な感情を併せ持っている状態が多いことが報告されている（嶺崎・伊藤，2006；大西ら，2013；山岡・中村，

* 広島大学大学院教育学研究科特別支援教育学講座
** 日本学術振興会
*** 滋賀県スクールカウンセラー
**** 児童養護施設鹿深の家
***** 井原市子育て支援課
****** 広島大学大学院教育学研究科博士課程前期学習開発学専攻

2008；柳楽・吉田・内山，2004；山根，2010)。その中でも、知的な遅れをともなわない発達障害のある子どもを育てる親の否定的な感情体験を生む特徴的な出来事としては、親が障害の兆候に気がついていながらも、診断が遅れる傾向にあること（柳楽ら，2004；山根，2010)、親の障害への認識と感情がずれた状態が長期にわたって続く可能性があること（柳楽ら，2004)、障害が見た目ではわかりにくく、特性が社会的に障害として認められにくいため、周囲の理解を得にくいこと（杉山，2000)、子どもの障害の存在を理解しながらも障害が将来におよぶものとして認識し難いこと（柳楽ら，2004）などが挙げられている。

山根（2010）および山根（2012）は、知的障害をともなわない発達障害児の場合、親が障害認識に困難をともなうことを踏まえて、親の障害認識の変容だけでなく、その過程で体験される周囲の理解やサポートなどの環境を含めた親の体験を捉えることの必要性や、親の適応にとって、親が子どもの障害をどのように捉えるかは重要な要因であると述べている。

中川（2003）は、子どもに対する親の意識を捉えるにあたり、障害のある子どもを育てる母親が、子どもとの関係や母親自身の生活や人生との関係において、母親としての自分をどのように認識し、子どもに対する「母親意識」が、それ単独で形成され変容していくものではなく、日々繰り返される他者との相互作用を通じて形成されていくという問題意識を持つことの必要性を述べている。そして、その社会的相互作用の中から母親がどのように「母親意識」を形成し、変容させていくかという点に着目した研究を行った（中川，2003)。また、親が子どもの存在をどのように捉え、どのような意識で育児に挑んでいるかといった親自身の育児観や、ソーシャルサポートと育児感情の関連等も考慮する必要があると示唆する研究（大西ら，2013）や、アスペルガー症候群の子どもを育てる母親の心理的変容過程が促進された要因として、援助資源のコンサルテーション、子どもや母親の自助資源への着目、多面的なアセスメントの結果の共有、子どもと学校への折り合いへの着目、親をエンパワーメントしたことを指摘する研究（田村・石隈，2007）もあり、親と子どもの一対一の関係に注目するのではなく、親子を取り巻く環境を含めた検討が必要である。

本研究では、子どもの成長とともに子どもの行動や様子に対する親の認識がどのように変化するのかを捉えるために、出生から専門家による支援を開始するまでの間に焦点を当て、特別な支援を必要とする子どもを育てる親の認識変容モデルを生成することを目的とする。

Ⅱ．方法

１．対象

特別な支援を必要とする子どもの父母。子どもは面接調査時３歳であり、保育園に通園していた。

２．調査方法

2018年２月に、父母に対して、約１時間半の面接調査を実施した。調査者は父母に対して、「出生から今までの子どもの様子とそれに対する思いを話してください」と投げかけて調査を開始した。面接調査中、調査者は父母の話に対して相槌を打つ程度に留め、操作的な質問等は特に行わなかった。話の内容はICレコーダーで録音した。研究の実施に当たっては、対象者が不利益を被らないこと、研究への参加について対象者の自由意思を尊重すること、個人情報保護を守ることを厳守した。

３．分析方法

分析対象は、面接調査で得られた父母の話であった。本研究では、子どもの成長にともない、どのような場所に行き、どのような人たちに出会い、どのようなことが起こったのかなどの環境を含めて、親が子どもをどのように認識してきたかについて親の心理過程を明らかにする目的のため、質的研究法を採用した。分析方法は、質的研究法の中でも修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下、M-GTAとする）を用いた（木下，2007)。M-GTAを採用した理由としては、研究対象としている現象がプロセス的な特性をもっており、予測して人間の行動の何らかの変化と多様性を説明できること、提示された研究結果は、データが収集された際と同じような社会的な場に戻され、試されることによってその出来ばえを評価するという立場をとる、実践的な活用のための理論であることであった（木下，2007)。

４．分析手続き

分析は４段階で実施した。第一段階では、文意を損なわないように父母の話を区切り、これを分析の最小単位として用いながら、概念を生成していった。第二段階では、概念の妥当性を高めるために、第一段階の作業を実施した第一著者が、約一か月後に、再度、概念化の作業を行った。第二段階の作業終了後、第一段

階で概念化した内容と第二段階で概念化した内容を比較し、異なる概念については、再度、第一著者が検討し概念化した。さらに、概念と概念の比較を繰り返し、本研究の目的に照らし合わせて、理論的飽和の状態になったところで作業を中止した（Table 1）。第三段階では、それぞれの概念を比較して概念間の関係を捉えつつ、カテゴリーを作成した（Table 2）。カテゴリーについても、カテゴリー間の関係を捉えつつ、カテゴリーグループを構築した（Table 3）。第四段階では、カテゴリーグループの関係を図に表し、関係性や時間の流れが説明できるようにした（Fig. 1）。結果および考察では、分析結果の現象的概要を、カテゴリーや概念を用いて記述するストーリーラインを記述した。

Ⅲ．結果および考察

本研究では、子どもの成長とともに、親の子どもに対する認識の経過が明らかになった。

まず、親が子どもを認識する基本には、例えば、「親がきょうだいを抱っこしているとき、児はきょうだいを下ろすよう要求してきた。これは、きょうだいに対して、自分は抱っこをしてもらっていないのに、という嫉妬心から生じた要求ではなく、親がきょうだいを抱いていることによってお菓子の袋を開けてほしかったのに開けてもらえない、という状況が生じたからだと思う。（児は、このような状況に嫉妬心を抱くのではなく、自分の要求が叶えられないことの方に重きを

Table 1　概念の生成

概念名	データの例
① 過去に困っていた行動	泣くから床に置けなくて、常に誰かが抱っこしてないとだめで（泣き続けていた）。
② 過去の様子	常に両手足が動く。
③ 過去の行動や様子に対する感情	（母親が子どもを呼んでも反応しないので）耳が聞こえてるのはわかるけど、普通だったら聞こえてないかもって心配になった。
④ 過去の行動や様子に対する理解	注意がこちらに向ききらなかったのか、色々な所に注意が転動してた。
⑤ 過去に疑問に思っていたこと	原始模倣をすると思ってやってみたが、あまりしなくて、なんでだろうと思っていた。
⑥ 当時の感情	そうじゃないかなっていうことは思っていたけれども、どっかやっぱり（否定したい気持ちがあった）。
⑦ 現在の様子	（YouTube で見ている子どもと）同じように言ってみたり、同じようにやってみたりしていた。
⑧ 現在困っている行動	叩くとか、取るとか。
⑨ 現在の様子に対する感情	公園の遊具に興味でてきて感動した。
⑩ 現在の行動や様子に対する理解	アウトプットはかなりいろいろあるけど、受け（相手からの情報を受け取る力）が弱い。
⑪ 現在の気持ち	だんだん育てやすくなった。
⑫ 発達的指標	初期の身体的な発達にはそう大して遅れはなかったように思う。
⑬ きょうだいとの比較	きょうだいが生まれて初めてその子が育てやすいということ以上の差があるなって気づいた。
⑭ 定型発達児との比較	赤ちゃんってだいたい２か月くらいしたらちょっと（外に）開かれてくるとこがあるけど、この子そうじゃなくてずっとアプローチとかにもあんまりリアクションがなくって、ただ不快みたいな感じだったのかなと思っていた。
⑮ 偏食	カレーとかもまだなかなか難しい。
⑯ 周囲の評価	（子どもの泣きがひどすぎて）骨が折れてるって（言っていた）。
⑰ 周囲への対応	園で特性についてずいぶん話した。
⑱ 何らかの対応を取るに当たっての背景	きょうだいが生まれて、妻がきょうだいの世話をして、この子の世話をするというのはもう限界があるなと思って、保育園の一時預かり保育をやっぱり使っていかないと回らない状況だった。
⑲ 親としての感情	周りとの比較ではなく、これができて僕（父親）も嬉しいみたいなことがすごく強くなってきて、それはすごく得がたいものとして教えられているのかなと思う。
⑳ 契機	きょうだいが生まれて、その後くらいからすごく変わってきたなという感じがあった。
㉑ 特性	逆さバイバイはなかなか直らない。
㉒ 将来への不安	小中がネックだなと思っていて、そこさえ乗り越えることができれば、この人は多分幸せに生きていけると思う。
㉓ 期待	これからどのような選択をするのか、どのような経験をするのか楽しみにしている。

Table 2　カテゴリーの統合

カテゴリー	カテゴリーに含まれる概念
1　標準的な発達との比較	②過去の様子／⑫発達的指標／⑬きょうだいとの比較／⑭定型発達児との比較／㉑特性
2　特性に対する気づきへの葛藤	①過去に困っていた行動／④過去の行動や様子に対する理解／⑤過去に疑問に思っていたこと／⑥当時の感情
3　徒労感	③過去の行動や様子に対する感情／⑯周囲の評価
4　行動特性の捉えと解釈	⑩現在の行動や様子に対する理解
5　課題	⑧現在困っている行動／⑮偏食
6　成長と変化	⑦現在の様子
7　育てやすくなった事への実感と新たな課題	⑨現在の様子に対する感情／⑪現在の気持ち
8　変化のきっかけ	⑰周囲への対応／⑱何らかの対応を取るに当たっての背景／⑳契機
9　親子の成長に対する期待	⑲親としての感情／㉓期待
10　将来への不安	㉒将来への不安

Table 3　カテゴリーの生成

カテゴリーグループ	カテゴリー	カテゴリーの定義
Ⅰ　子どもの様子に対する不安	1 標準的な発達との比較	子どもの様子と標準的な発達過程とを比較して確認すること
	2 特性への気づきとそれに対する葛藤	子どもの様子に違和を覚えて不安な気持ちを持つこと
Ⅱ　子育てに対する徒労感	3 徒労感	子どもへの関わりがうまくいかず徒労感を覚えること
Ⅲ　子どもの変化に対する親の認識	4 行動特性の捉えと解釈	子どもの行動に対して親が意味づけを行うこと
	5 課題	親が困っていること
	6 成長と変化	成長にともなって変化を感じること
	7 育てやすくなったことへの実感	課題が解決すること
Ⅳ　本児や家族に変化をもたらしたきっかけ	8 変化のきっかけ	現状を変える契機になったこと
Ⅴ　本児や家族の将来への展望	9 親子の成長に対する期待	家族を含めた今後のあり方に期待すること
	10 将来への不安	今後課題になりそうなこと

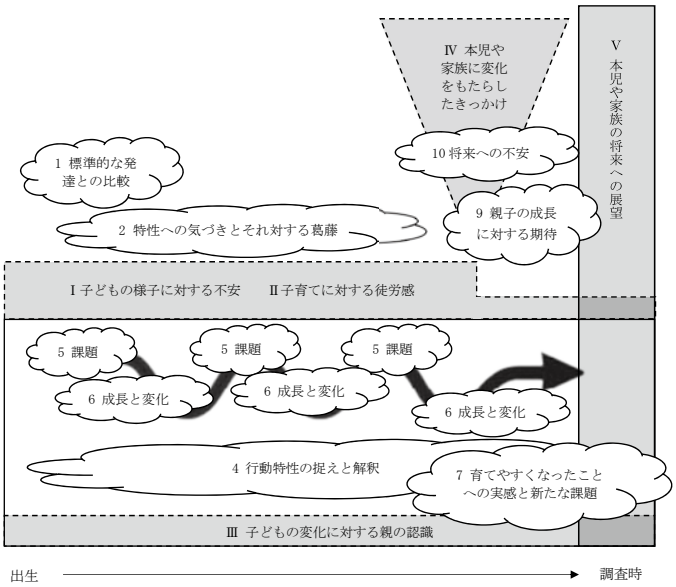

Fig. 1　親の子どもに対する認識の変化

おいている。)」など、親が子どもの〈現在の行動や様子に対する理解〉をし、そこにどのような特徴があるのか、どのような背景や意味があるのかについて【行動特性の捉えと解釈】を行っていた。これは、出生後から現在に至るまで続いており、親が絶えず子どもを理解しようとする姿勢がうかがえた。

子どもの泣く、叩く、蹴るなどその時々で親自身がどうしたらよいかわからない〈現在困っている行動〉は、親や子どもにとって【課題】となっていた。しかし、心身の成長により一定時間が経過したり、何らかの対応策を講じたりすることによって、問題解決したり問題解決に向かう〈現在の様子〉を目の当たりにすると、親は子どもの【成長と変化】を感じ、【育てやすくなった事への実感と新たな課題】を見いだしていた。とはいえ、障害幼児をもつ親の多くは、子どもの行動特性を理解・受容することの必然性を感じながらも、日常的には、認識しているほど、子どもの行動に対して寛容的ではいられない状態があると考えられる（澤江, 2001）と指摘されているように、出生以降、【課題】→解決→【成長と変化】→【育てやすくなった事への実感と新たな課題】このサイクルを断続的に繰り返していた。しかし、【育てやすくなった事への実感と新たな課題】は成長するにつれて確実に増しているというのが〈現在の気持ち〉であった。【課題】と【成長と変化】のサイクルと、これに付随する【行動特性の捉えと解釈】および【育てやすくなったことへの実感】を、『子どもの変化に対する親の認識』と命名した。

親は、職業柄、子どもの発達に関する知識をもっており、子どもの出生直後から、子どもの行動や様子を〈発達的指標〉と比較したり、〈定型発達児との比較〉をしたりしていた。また、「きょうだいが生まれて初めてその子が育てやすいということ以上の差があるなって気づいた。」と発言しているように、きょうだいが生まれたことをきっかけに、同じ環境で同じ親が同じように育てる環境において、直接的に〈きょうだいとの比較〉をすることになり、児の〈特性〉を意識していた。また、親は、これらの比較において、「原始模倣をすると思ってやってみたが、あまりしなくて、なんでだろうと思っていた。」など〈過去に疑問に思っていたこと〉について語り、「そうじゃないかなっていうことは思っていたけれども、どっかやっぱり（否定したい気持ちがあった)」と〈当時の感情〉に葛藤があったことを述べた。このような【特性への気づきとそれに対する葛藤】については、継続的に生じていたが、【本児や家族に変化をもたらしたきっかけ】が起こるまでの間に特に多く生じていた。これら一連について、『子どもの様子に対する不安』と命名した。

『子どもの様子に対する不安』に付随して、親は、「（母親が子どもを呼んでも反応しないので）耳が聞こえてるのはわかるけど、普通だったら聞こえてないかもって心配になった。」「一緒にその場にいて遊んでいても、普通だったら（耳が）聞こえてないかもって心配になるような無視のされ方というか、自分が加味されていない感じがあった。」など、子どもとの関わりに関して徒労感を感じたことを〈過去の行動や様子に対する感情〉として語った。これを『子育てに対する徒労感』と命名した。

一方で、きょうだいが生まれて実質的に世話に手が回らないなど〈何らかの対応を取るに当たっての背景〉が生じたり、生活に変化をもたらしたりする〈契機〉が起こることによって、「きょうだいと触れ合う」「保育園にいく」など児の生活において変化が生じた。これにともなって、親は、児の生活を充実させていくために「保育園で特性について話をする」などの〈周囲への対応〉を行っており、これが【変化のきっかけ】になっていた。これまで集団生活の経験のなかった子どもが、同年代の子どもと触れ合う経験による成長は著しく、【変化のきっかけ】が起こった後、親の『子どもの様子に対する不安』や『子育てに対する徒労感』が減少していた。これを『本児や家族に変化をもたらしたきっかけ』と命名した。大西ら（2013）は、早期療育の段階で、親が子どもの行動や特徴を適切に理解していくことができるような支援および親への心理的サポートが、専門家によって適切になされる必要があると指摘している。本研究で対象とした親は、職業柄、子どもの行動や特性を理解することに関して精通していたため、子どもの行動を理解し解釈しようと努め、不安や葛藤を抱えながらもその気持ちを成長や期待につなげていた。しかし、子育ての戸惑いや苛立ち、不安の起因は、主として障害のある幼児を持つことによる慢性的な緊張や不安であると推察されており（澤江, 2001)、子どもの行動や特性を理解することに精通していない親が緊張や不安を解消するのは容易ではないことが推測される。大西ら（2013）は、高機能広汎性発達障害の子どもを育てる母親が、療育プログラムに参加する中で子どもをどのように捉えるのか、その変容過程を検討することを目的として、自由記述による質問紙調査および半構造化面接による研究を実施した。その結果、母親は、肯定的側面と否定

的側面とが常に混合した感情を持ちつつ、子どもの捉えとしては、子どもの問題行動に否定的な感情を抱くが、その原因や対処についてよくわからないでいる状態から、人との関わりの中で見られるズレを問題として取り上げ、何が原因であるかを見いだせるなどの経過をたどって、子どものへ関わり方のレパートリーが増え、子どもに合わせた対応がなされるに至ったことを報告した（大西ら，2013）。支援者には、親が子どもを客観的に見ることのできる場を設定したり、親と一緒に子どものことを考えていく構えが望まれる。

【変化のきっかけ】によって、親は、外部機関や他の保護者とつながり、子どもの明確な【成長と変化】を感じていた。このことは、親の「周りとの比較ではなく、これができて僕（父親）も嬉しいみたいなことがすごく強くなってきて、それはすごく得がたいものを教えられているのかなと思う。」などの〈親としての感情〉や「これからどのような選択をし、どのような経験をしていくのか」という〈期待〉にもつながっていた。そしてこれは、児に関することだけでなく、「家族を含めてどのように成長していくのか。」「児によって気づかされたことを、きょうだいの育児にも反映させていけるのではないか。」などの【親子の成長に対する期待】であった。近い〈将来への不安〉として、親は、決められた枠で生活することが多い学齢期への適応について挙げていた。これら一連について、『本児や家族の将来への展望』と命名した。大西ら（2013）は、自身の子どもをその成長だけに焦点を当ててみた場合には肯定的側面が捉えられるが、子どもを集団の中においてほかの子どもと比較した場合には、否定的な感情抱きやすいことを指摘している。児は、今までに集団の中に置かれる機会が少なく、この点についての親の感情の捉えは不十分であると考えられるため、今後の経過を追っていきたい。

Ⅳ．おわりに

本研究では、特別な支援を必要とする子どもを育てる親が、成長にともなって変化する子どもの行動や様子をどのように認識しているのかについて、認識変容モデルを生成した（Fig. 1）。その結果、親の認識は子どもの成長にともなって変容していくものの、なぜそのような行動をとるのだろうかと子どもの行動を解釈したり、課題を発見したり、子どもの成長や変化を感じたりすることについては、出生以降現在まで断続的に続けられていた。不安や子育てに対する徒労感は継続的に一定程度見られるものの、社会資源とのつながりにより、保護者の認識に変容が見られたことで、不安や徒労感が減少し、家族を含めた将来への展望が見られた。

澤江（2001）は、障害幼児をもつ親の子育ての戸惑いや苛立ち、不安の状態を捉えようとする場合、子どもとの関係のうち、子どもの行動に対する認識を合わせた親の認識を取り上げて検討することが必要であり、現実の子どもの行動や自分自身の親としての行動を、内在的に保存されている子ども行動イメージや親行動イメージを参照することにより、その「子どもに対する関係認識」の状態が決定されると指摘している。今回の研究では、子どもを中心とした「子どもの行動に対する（親の）認識」は検討することができたが、親を中心とした「自分自身の親としての行動をどのように捉えているか」ということについては十分に検討することができなかった。中川（2003）および中川（2005）は、重症心身障害児を育てる母親の意識変容について、障害軽減を自分の使命として考え自己犠牲を払ってでも全面的に引き受けようとする 「子へのトータル・コミットメント」の意識は、母親が果たすべき役割として周囲が与える「役割的拘束（例えば、母親自身が楽しむ時間など持たず、子どもを一生懸命育てるよう、周りの人が母親に圧力をかけるなど）」を自己調整（例えば、周囲の人の発言によって母親が傷つきそうになったとき、母親がその発言に対して言い返すなど）することによって、「子と自分のバランスをとろう」とする欲求を生み出し、コミットメント意識を変容させる重要な要因になっていることを報告している。今後は、親の子どもの行動や様子に対する認識を捉えるとともに、子どもがいる環境において、親が自分自身のことをどのように捉えているのかについて、親自身のあり方に対する考えや育児観などを含めて検討を重ねていきたい。

引用文献

Drotar, D.,Baskiewiez, A.,Irvin, N.,Kennell,J.& Klaus,M.D.,（1975）The adaptation of parents to the birth of an infant with a congenital malformation: A hypothetical model. *Padiatrics*, 56, 710-717.

木下康仁（2007）修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）の分析技法．富山大学看護学会誌，6(2)，1-10.

嶺崎景子・伊藤良子（2006）広汎性発達障害の子どもをもつ親の感情体験過程に関する研究．東京学芸大学紀要（総合教育科学系），57，515-524.

柳楽明子・吉田友子・内山登紀夫(2004)アスペルガー症候群の子どもを持つ母親の障害認識に伴う感情体験：「障害」として対応しつつ，「この子らしさ」を尊重すること．児童青年精神医学とその近接領域，45(4)，380-392.

中川薫（2003）重症心身障害児の母親の「母親意識」の形成と変容のプロセスに関する研究．保健医療社会学論集，14(1)，1-12.

中川薫（2005）「子と自分のバランスをとる」－重症心身障害児の母親の意識変容の契機とメカニズム－．保険医療社会学論集，15(2)，94-103.

中田洋二（1995）親の障害の認識と受容に関する考察－受容の段階説と慢性的悲哀－. 早稲田心理学年報，27，83-92.

Olshansky,S.（1962）Chronic sorrow: A response to having a mentally defective child. *Social Casework*, 43, 190-193.

大西慶子・永田博・武井祐子（2013）高機能広汎性発達障害児をもつ母親の子どもの捉え方とその変容過程：療育プログラムに参加した母親を対象とした質的研究．川崎医療福祉学会誌，23(1)，159-168.

澤江幸則（2001）障害幼児をもつ父母の「子育て感」に関する研究「子どもに対する関係認識」との関連に着目して．東北教育心理学研究，8，29-40.

杉山登志郎（2000）軽度発達障害．発達障害研究，21，241-251.

田村節子・石隈利紀（2007）保護者はクライエントから子どもの援助のパートナーへとどのように変容するか－母親の手記の質的分析－．教育心理学研究，55，438-450.

山根隆宏（2010）高機能広汎性発達障害児・者の母親の障害認識過程に関する質的検討．家庭教育研究所紀要，32，61-73.

山根隆宏（2012）高機能広汎性発達障害児・者をもつ母親における子どもの障害の意味づけ：人生への意味づけと障害の捉え方との関連．発達心理学研究，23(2)，145-157.

山岡祥子・中村真理(2008)高機能広汎性発達障害児・者をもつ親の気づきと障害認識：父と母との相違．特殊教育学研究，46(2)，93-101.

（2019. 1. 10受理）

Parents Involvement in Their Child with Pervasive Developmental Disabilities

Rie MURAKAMI
(Graduate School of Education, Hiroshima University)

Ayaka TAKAHASHI
(Japan Society for the Promotion of Science)

Chie TSUNASHIMA
(School counselor, Shiga Prefecture)

Yosuke TSUNASHIMA
(Child and family services "Kafuka no Ie")

Saori MURAKAMI
(Child-rearing support section, Ibara City)

Nodoka SAKAI
(Graduate School of Education, Hiroshima University)

The purpose of this study was to create a model of recognition change to show how parents understands the behavior of children with pervasive developmental disabilities. Interviews were conducted with a parents of child with pervasive developmental disabilities, having them recount the state of their child from birth to the present day and their feelings about their child's growth. After analyzing the content of the interview using the Modified grounded theory approach, 10 categories were generated from 23 concepts, which were ultimately compiled into 5 category groups. The results showed that the parents' recognitions changed in accordance with the child's growth. However, interpreting their child's behavior (i.e., Why do the children take such a behavior?), discovering issues, and realizing the growth of and changes in their child were continuously experienced. Although the parent has anxiety and psychological fatigue for the child care continuously, such feelings were seen to decrease as their connections with social resources changed the parents' recognitions. Consequently, they recounted future prospects regarding their family.

Keywords: developmental disabilities, growth, parent, recognition, change